

## 刊行に寄せて

大本山 高尾山 薬王院

貫首 大山隆玄

當山が発行しております『高尾山報』には、東京都台東区の成就院御長老で、大正大学名誉教授であります福田亮成先生の文章が長らく連載されておりました。しかし、諸般の事情によりまして、次の執筆者を選ぶこととなり、福田先生との相談を経て、高尾山法類寺院の普濟寺（栃木県さくら市）の御住職をつとめつつ、大正大学で教鞭をとる高橋秀城君に執筆をお願いすることになりました。

そして平成二十四年七月号から『高尾山報』において、「法の水荃（のりみずくさ）」と題して連載がはじまり、八年の歲月を経て現在も続いております。

この「法の水荃」は、彼の専門である文学研究と僧侶という立場を合わせた視点から述べられたものであり、古（いにしえ）の風雅な和歌を織り交ぜ、仏教説話や四季折々の仏教行事を紹介しつつ書かれています。言葉の端々に筆者の優しい性格が表れて、決して難しく書かれておらず、ほとんどの漢字にルビをつけるなど、読

みやすきに配慮しているのも嬉しく思われます。

令和二年十月号で連載が百回目となり、加筆・編纂をして本人より書籍としてまとめたいとお話があり、高尾山も全面的に協力致すことにしました。

私は、ご先代の山本秀順大僧正のもとで、俳句をたしなむようになりましてから、自然の風物に雅な趣おもむきを感じるようになり、人は「物のあわれ」というような美しい情操を身につけ、「あわれ」を知らなければ心なき人になってしまうと思うようになりました。

このたび、『法の水荦―和歌とおはなしでひもとく仏教―』と言う題名で発刊の運びとなり、この本が、すべての方々にとって古いにしへから伝わる日本の和歌や仏教説話、昔話等を通して古人の雅みやびの情こころに触れるものとなり、平安時代から現代までの世の有様を知る一助となりますことを、心から祈念する次第であります。

令和二年十一月吉祥日

## 巻頭言

私は毎年八月に入ると、先の大戦にかかわる書物を読むことを習慣としている。今年はコロナ禍による外出自粛の中、ナチスにかかわる『普通の人びと―ホロコーストと第一〇一警察予備大隊―』（ちくま学芸文庫）、『アイヒマン調書―ホロコーストを可能にした男―』（岩波現代文庫）、『戦争は女の顔をしていない』（岩波現代文庫）を讀了した。そのあまりにも悲惨な様子に心が渴ききつてしまい、途中何度も『西行全歌集』（岩波文庫）を手にとったものであった。

西行（一一一八―九〇）は、平安末の歌人であり、密教僧でもあった。従来の和歌はもっぱら花鳥風月がテーマであったが、西行にいたり、深く心の底を穿った仏教的、密教的な視点からの歌をつくり、従来からの和歌の世界に一大転換をもたらしたといわれている。

弘法大師空海は、

真言秘藏は経疏に隠密にして、図画を仮らざれば相伝すること能はず  
（『御请来目録』）

と述べておられるが、西行にとっては、図画をば和歌にとらえなおしたにちがいない。それが、大きく和歌表現の内容も深化させ、和歌陀羅尼論まで生み出したといえないだろうか。

そもそも仏教のめざすさとりの世界は、経論の多く指示するものであったが、さとりそのものの世界は、仏教語のみで明らかにすることは不可能であり、特に日本人のそれは、文学的な表現をとらざるをえない。弘法大師空海は、『三教指帰』の序文において、ひとり「沙門からさずかった「虚空蔵求聞持法」を、四國の山野において修した暁に、体験した境界を、

たにひびき 谷響を惜まず みょうじょうらいえい 明星来影す

と、実に文学的である。これは、修業中の精神が感じ取った情景をそのままに述べたものにちがいない。もう一つあげてみよう。『即身成仏義』の三密加持速疾頭の説段において、大日如来と私達とのを彼此摂持をということをも、加持という言葉の定規をもって、

如来の大悲と衆生の信心とを表す。仏日の影、衆生の心水に現ずるを加といひ、行者の心水よく仏日を感ずるを持と名ける

と。これも深い宗教的な体験に裏付けされた、実に文学的な表現ではないだろうか。

弘法大師空海には、密教の内実をかたる教義書の外に、『文鏡秘府論』、『文筆眼心抄』の詩論書がある。それらは、同じ視点かつその両方を豊かに含んだ『性霊集』に自由自在かいちんに開陳かいちんされている。

本書は、高橋秀城君が、『高尾山報』に「法の水茎」として、一〇〇回の投稿原稿を、『法の水茎—和歌とおはなしでひもとく仏教—』として刊行されるものである。高橋君が専門とする研究課題は、和歌を含む仏

教文学である。そのような視点から密教への参入は、今迄あまりやられてこなかった貴重な成果である。熟読じゆくどく玩味がんみし、高橋君の思いを深く理解したいものである。

合掌

令和二年九月吉日

福田亮成 識

## はじめに

いにしえの和歌やおはなしを読みながら、仏教の世界に分け入ってみませんか。日本の和歌や説話、物語といった文学作品を眺めてみると、いろいろなところに仏さまの教えがちりばめられていることに気づきます。仏教の教えを土台として書かれた作品も少なくありません。

例えば、このような歌があります。

仏も昔は人なりき われらも終には仏なり 三身仏性具せる身と 知らざりけるこそあはれなれ

(後白河法皇撰『梁塵秘抄』)

これは、今から八五〇年ほど前の平安時代の終わり頃の流行歌です。心地よい七五調のリズムに乗せながら「仏さまも遠い昔は人でした。私たちもいつかは仏になります。ただ、この身体に仏さまの身体や心が備わっていると知らないで、仏道を気にかけないでいることが悲しく思われるよ」と詠っています。やわらかな言葉の中に、仏さまの深い教えが込められています。いにしえの人々は、いつも身近に仏さまを感じていたからこそ、このような歌を口ずさみ、自ずと広まっていったのでしょう。

本書のタイトル「法の水茎」は「法の水茎の跡」という言葉を略したものです。「法」は「仏法」を表

し、「水茎の跡」は「筆跡や手紙」を意味します。「仏教にまつわるお話」を集めたことから「法の水茎」と名づけました。お経はもちろんのこと、和歌や説話などの文学作品の中にも「法の水茎」は多く含まれています。「水茎の跡は千代もありなん」という諺もあるように、仏さまの心が込められた先人の「法の水茎」は、これからも時を超えて後世まで伝わっていくものでしょう。

本書は、仏教や文学について解説した入門書でもなく、仏教や文学の専門的な知識を身につけるものでもありません。古典文学作品を入り口として、仏教の深遠な教えに近づいていくことを目的としています。悩み多き現代を生きる私たちにとって、「法の水茎」は、時に心を慰め、時に心ゆたかな人生を歩むための道しるべとなるかもしれません。仏の教えに彩られた珠玉の言の葉に触れながら、皆さんとともに一歩ずつ仏の道を歩んでいきましょう。

なお本書は、東京都八王子市にある真言宗智山派大本山高尾山薬王院発行『高尾山報』に「法の水茎」として連載したものがもとになっています。この度一書にまとめるにあたり『法の水茎——和歌とおはなしでひもとく仏教——』とし、各話のキーワードとなる仏教語の解説を加えました。合わせて末尾に「菩薩行」という亡き父の思い出を綴ったエッセイも加えました。

広く仏教や文学に関心を寄せる多くの方々手に取っていただけますことを願っています。

## 目次

揮毫	大本山高尾山薬王院貫首	大山隆玄
刊行に寄せて	大本山高尾山薬王院貫首	大山隆玄
巻頭言	大正大学名誉教授	福田亮成
はじめに		vii
① かたじけない涙、高尾山の自然に抱かれて		2

### I 五大（地・水・火・風・空）のお話

水 ② 滝行のご加護	『平家物語』『文覚荒行』、『古今集』『仮名序』	8
水 ③ 煩惱を洗い清める	頼阿『井蛙抄』、西行『山家集』	12
風 ④ 天狗の風	長門本『平家物語』	16
風 ⑤ お経の声は風の音	頼瑜『真俗雜記問答鈔』	20



